
【掌篇】指切りディストピア

高島津諦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【掌篇】指切りデイストピア

【Nコード】

N0210V

【作者名】

高島津諦

【あらすじ】

私と彼女、恋人同士がくつろぎながらの会話。twitterで書いた物を編集してpixivに載せたものの転載です。

毎晩、ソファの端っこに私が座り、その膝の上に小さな頭を乗つけた彼女が横になって、一緒にテレビやDVDを見る。見ている間はあまり喋らず、一区切ついたところで見た物について会話するのが常だ。今日の映画は近未来SFだった。

「噂だけどさ」とおもむろに彼女。

「何？」

「数年後くらいに、私たちみたいのは犯罪になるかもって」

「私たち？」

「女同士ってこと」

「ああ……」

こんな話をする彼女は、不安、なのだろうか。

「もしそうになったらどうする？」

「海外に逃げようよ」

私の答えに彼女は首を振る。

「もっと厳しいよ」

「……そうだね」

「隠すのには限界があるし。別れるか、心中だ」

私は真剣に考えて答える。

「……私は、チカとじゃなきゃ生きてけないけど、チカには一人でも生きていつてほしい」

「私も一緒だ」

「お互いわがままだねえ」

「伊達に親を泣かせてないよ」

「じゃあどうしよう」

私の問いに、彼女は小さく笑った。

「約束しよう」

「どんな？」

「その時が来たらすっぱり別れる。その後お互い相手とは一切接触しない、調べもしない」

別に突飛な所のない約束のように聞こえて、でも彼女がこういう風に言うってことは何か意味があるはず。それを想像して、創造して、

「……それってつまり、別れた後は相手に自分のことは全然伝わらないから……お互いに相手は無事だって信じながら……」

「まあその可能性もあるね」

「……うわあ」

「約束する？」

彼女は悪戯っ子のような、でもどこかニヒルな表情で小指を差し出してくる。

「……する。指切りげんまん」

「嘘吐いたら針千本吞ます」

「指切った」

「よし。……ちょっと怖い話だったかな」

「でも、悪くないよ」

「ふふ」

架空の噂に、架空の約束をして、同性でも罪にならないのは恵まれてるって、色々不自由な現実も大したことじゃないって微笑みあって、私たちはまた、長い夜と一緒に過ごす。

(後書き)

お読みいただきありがとうございました。会話主体の話を書いてみようと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0210v/>

【掌篇】指切りディストピア

2011年11月17日04時35分発行